省エネ徹底追求 ポンプ世界一へ

西島製作所



原田 耕太郎 代表取締役ＣＥＯ

オイル&ガス・ケミカルを新たな柱に

海水淡水化市場向け高圧ポンプメーカーとして世界首位の西島製作所。海淡市場が減速しているものの、データセンター向けで急拡大する発電市場の需要を取り込み、前期の売上高は過去最高を更新した。今年7月には石油化学分野を中心に蒸気タービン・プロセスポンプを展開する新日本造機を取得し、2026年度は29年度の目標として掲げていた売上高1000億円規模の超過を見込む。〝水〟に続いてオイル&ガス・ケミカル向けを新たな柱へ育成し、「ポンプ世界一を目指す」とする原田耕太郎代表取締役CEO（最高経営責任者）に聞いた。

▼…〝水〟の西島が石油化学分野を目指した経緯とは。

「上下水道や排水処理、灌漑用水など官公需をはじめ、民需では製鉄所や発電所向けなど〝水〟のポンプを手がけており、とくに海水淡水化ではシェア9割、日本国内ではほぼすべての発電所に納めている。その一方で、海水淡水化施設や発電所の付近ではオイル&ガスの上流から下流施設までさまざまなポンプが動いており、それらも手がけたいとかねて考えていた。ただこの分野は安定操業の実績が重視され、プラントメーカーやエンドユーザーのベンダーリストに入っていなければ門前払いとなる。大流量遠心ポンプでは技術的に世界一だと自負しているが、参入の足がかりを得ることが難しかった。それが中東やアジア、欧州、日本国内ではすべての製油所に実績を持つ新日本造機を取得したことで道が開けた」

▼…オイル&ガス・ケミカル分野の事業環境をどうみますか。

「50年カーボンニュートラル宣言以降は化石燃料に逆風が吹き、当社も液化水素やアンモニア関連に力を入れてきた。だが生成AI（人工知能）の普及拡大による電力需要の急増が脱炭素案件の逆風となり、世界的に投資がスローダウンした。足元では化石燃料関連への投資が拡大しているほか、中東情勢緊迫化の影響もあって、日本国内では縮小傾向にあった石油・石油化学関連設備を更新していく機運も高まっている。当初は脱炭素を切り口に参入を狙っていたが、石油・石油化学、液化天然ガス（LNG）分野も世界的に活況となり、当社にとっては追い風が吹いている」

▼…今後の成長において切り札となるのは。

「約1兆ドル時とされる日本国内の電力使用量のうち、ポンプを駆動するために使われる電力は約30%といわれている。このエネルギー多消費機器を省エネ化すれば世界中どこでも使ってもらえる。そう考えて省エネを徹底的に追求し、世界で戦い勝ってきた。将来的な脱炭素が世界潮流となるなか、稼働安定性を最優先してきたオイル&ガス分野でも省エネは欠かせない。そこに当社の伸びしろがある。この一例として、約10%の省エネを実現するLNGポンプを製品化し、LNGの輸送・供給分野に展開していく」

▼…ポンプ市場で目指す姿とは。

「世界のポンプ市場は約7兆円とされており、人口増加などを背景に拡大を続けている。中国には数千ものポンプメーカーがあるが、オイル&ガス・ケミカルをはじめとした高温・高圧・大流量ポンプが使用されるエネルギー多消費分野は古くから欧米系の牙城となっている。約1兆円のハイテクポンプ市場は日欧米5社でシェアしており、首位は3000億円規模だ。ここでもっとシェアを高めていき、世界一を目指したい」

（聞き手＝石井惇子）

出所：『化学工業日報』2026年11月11日付（許諾番号：GN261111CD001）
※株式会社化学工業日報社の許諾を得て転載しています。無断転載・複製を禁じます。